

新進芸術家海外研修制度 研修結果報告書

研修開始年度 | 令和 3（2021）年度

分野 | 演劇（社会包摂系舞台芸術）

研修先 | イギリス（ロンドン）

研修期間 | 1 年

氏名 | 中野 敦之

1. 研修目的（課題）

神奈川県内で取り組んできた社会包摂系事業「共生共創事業」の発展

2. 研修日程

研修先 : オールバニー劇場 (The Albany)

所在地 : イギリス (ロンドン)

指導者 : ギャビン・バロウ (Gavin Barlow)

研修期間 : 令和 4 (2022) 年 1 月 31 日～令和 5 (2023) 年 1 月 1 日

3. 研修内容、成果

A) 研修課題の題目

【課題】英国ロンドンの劇場 The Albany における社会包摂系事業の世界的先進事例

B) 研修の成果

大幅に達成できた

理由としては、2017～2021 年に自己流で進めてきた神奈川芸術文化財団での社会包摂系事業を、今後どのように改変・発展させていけば良いか明確なビジョンを持つことができたことが挙げられる。以下①～⑥に分けてその細目を記すが、実際に研修内容を神奈川や日本に反映させられるかどうか重要であり、本来の達成度はそこで初めて問われるものと認識している。

①The Albany の運営状況

私が選んだ研修先は The Albany (ジ・アルバニー) という。ロンドンに 32 ある特別区のうちルイシャム区に所在する劇場である。都心から電車で 20 分ほど。ルイシャム区は移民の多い地区で、中東、アフリカ、カリブ、アジアに出自を持つ人たちが多く暮らしている。ロンドンの中で経済力や治安には恵まれていない地域だ。

The Albany は 19 世紀の終わりに地元の篤志家によって創立された。公共でなく、私立の劇場である。初めは地域の人たちに優良な舞台芸術を紹介することを目的にスタートしたが、その運営は時代とともに変遷し、現在の地域密着型、社会包摂系事業が徐々に意識されるようになったのは 1980 年代からだ。観客や地域のニーズに劇場が応えるために、いかにも高尚な芸術作品を上演するスタイルから、地域貢献や地元の人に受け入れられやすい催しに傾倒していこうという方針に変化したのだ。21 世紀に入りこの運営方針の変化は加速する。現在の運営代表 (CEO) であり、劇場全体の芸術監督である Gavin Barlow (ギャビン・バロウ) 氏が 2003 年にその地位に就くと、今に続く社会包摂系事業特化型のアートセンター化がはっきりしてくる。

どのような経緯で運営の変革が起こったのか、②③で説明したい。



The Albany 外観



劇場壁面 参加者の代表（左）チーフプロデューサー（右）を強く街にアピールしている

②社会包摂系事業は The Albany の生き残り戦略

21 世紀に入りギャビン・バロウ氏が運営代表に就任した時、The Albany は困窮していた。ルイシャム区（ルイシャム・カウンスル）をはじめとする公的機関からの文化予算は減額される一方であり、劇場で行われる催しの中には、観客の集まらないものが多くあった。要するに収入は減る一方であり、経営が悪化していた。

一方で、ルイシャム区自体もまた、経済的な問題が大きく膨れ上がっていた。その一端が高齢化である。区民の多くが高齢化するだけでなく、就業年齢にある人々が減って税の減収を招いていた。区民の高齢化により医療予算は増大。そこで一つの提案が The Albany に持ち込まれることになった。劇場における高齢者向けの参加型企画をつくり、区民に向けて発信することはできないか。

運営がひっ迫するバロウ氏としては、この提案に応えることで活路を見出そうとした。劇場が高齢者の参加型企画をつくれれば、地域の高齢者の健康悪化、社会的な孤立を防ぐことができる。そうすることで人々が活性化、健康状態を維持することができれば、彼らの医療機関にかかる区の医療補助負担が少なくて済む。文化予算は減少傾向にあったが、医療補助に使うより少ない金額であれば、劇場への助成が可能となる。つまり、困窮した The Albany とルイシャム区が協力することで、両者が財政的な展望を見出した。そのようなわけで The Albany の社会包摂系事業は拡充されることになったのである。まさに生き残り戦略。

この「生き残り戦略」という言葉の意味、響きは日本の公共劇場運営にとって大変に大きな意味を持つ。なぜなら、日本の公共劇場における社会包摂系事業への取り組み、それを支える意識は、まだまだ劇場運営が十全に行われた上の余剰として理解されているからだ。

日本全体の経済直の衰退により、いずれ起こる公的機関からの補助や助成の削減は目に見えている。が、そのことの危機感を切実に理解している公共劇場職員がどれほどいるか。劇場運営がこれからも万全で

あることを疑わず、その上で、公共性を担保するために何らかの利潤やサービスを地域に還元しているという理解に留まっている。日本の公共劇場における社会包摂系事業への意識は、概ねこのようなものなのだ。

研修先であった The Albany の切迫感とは、この点がはっきり違った。



The Albany CEO のギャヴィン・バロウ氏（右）と

③劇場とは人間関係の束

法人としての The Albany は、次の三つの建物を運営している。中核となる劇場 The Albany。そこから徒歩3分ほどのところにある Deptford Lounge（デプトフォード・ラウンジ）。ルイシャム区の北西端、都心の入り口ともいえる主要駅 London Bridge に迫ったところにある Canada Water Theatre（カナダ・ウォーター・シアター）の3館である。

三館の中にある施設をざっと書き出してみる。

The Albany・・・劇場（150席）、稽古場、会議室、カフェ、庭、大量のオフィススペース

Deptford Lounge・・・図書館、パソコン室、会議室、レクリエーション室、学童

Canada Water Theatre・・・劇場（100席）、図書館、カフェ、会議室

特筆すべきは、3館が持っている施設の中で公演発表の劇場空間はごく小さいものだということだ。The Albany が150席。Canada Water Theatre が100席。Deptford Lounge に至っては劇場そのものが無い一方、授業後の小学生たちが過ごすための学童施設を備えている。その他は図書館、会議室……。これらは、法人 The Albany が抱く劇場観を端的に物語っている。つまり、劇場は基本的に人々の生活からは縁遠い場所なのだ。人々の大半は一生を劇場と関係なく過ごす。劇場という場所は基本的に、ごく限られた人たちだけが立ち寄る場所。法人 The Albany の認識は明らかにそういう立場に立っている。だからこそ図書館や会議室といった、世間の人々にとって劇場よりも身近な施設を平行的に運営することで、それらが劇場への導線となるよう、あらかじめ入り口をセットしているのだ。

詳細は後述するが、The Albany 系列の2館が主催する公演には、ファミリー向けプログラムが多い。学童施設とキッズプログラムの相性の良さは言うまでもない。これもまた、劇場が人々にとって人生の早期に関わり、役に立つことをアピールするための仕掛けである。

また、3館の中心的な役割を果たす The Albany 施設のもっとも大きな特徴を紹介したい。それは、さまざま書いた施設のうち「大量のオフィススペース」にあたる。The Albany には大量のオフィススペース

がある。と言っても、巨大な一つのオフィスがあるのではなく、細かく仕切られた、10～15 人ほどが働くスペースが数多く連なっている。雑居ビルの中に間口の狭い店舗がたくさん入っているような具合であるし、かつて下町にあった長屋を彷彿とさせる。ここに、2022 時点で 26 の法人・団体が入っていた。

「法人・団体」内訳は劇団、アート系の活動を行う会社を中心に、ローカルラジオ局、近所の商店街連合会の事務局までもがある。The Albany ではこれらをレジデント・カンパニーと呼んでおり、カンパニーの面々は、ともに The Albany 内の劇場や稽古場、周辺地域を盛り上げるためのイベントを行う仲間であると同時に、法人 The Albany に毎月の家賃・店賃をもたらす重要な収入源でもある。レジデントカンパニーの中には、それぞれ「障害者企画が得意」「移民に関する企画が得意」「シニア向け企画が得意」といった具合に、The Albany が標榜する「社会包摂系事業」の大方針をともに実行するに相応しい団体が間借りしている。ラジオ放送局、商店街の事務局があることも、明らかに地域と劇場が連携する上で有効である。中には、あくまでも The Albany や周辺のルイシャム区は創作拠点であって、公演発表はもっと都心で行う団体もあったが、それはそれで The Albany の存在意義を社会手にアピールするのに大変有益な活動である。

というように、The Albany の建物そのものは2階建ての小さな、古ぼけた外観であるが、一方その中では、大変にたくさんの人々、団体が常態的に動いている。そのスペースの使い方には無駄がほとんどない。

カフェや庭は地域の人々が公演事業とは関係なく過ごす場所として馴染んでいるし、公衆トイレの数が極端に少ないロンドンにおいて、単なるトイレ利用も歓迎している。保育園の散歩コースに組み込まれ、子どもたちの休憩場所にもなっている。

カフェはワークショップやダンスの練習会場にもなるし、二つある稽古場は、いつもどこかのレジデントカンパニーが活用している。主催事業、レジデントカンパニーの公演、貸し館、練習用スペースとしてホールの稼働率も極めて高い。その間、各カンパニーや各企画のスタッフはもちろん、観客、ワークショップ参加者、通りがかりの人々がひっきりなしに出入りしている。風通しが良く、空気は人間の熱量に満ちている。要するに、スペースが死んでいる時間が圧倒的に少なく、生み出している企画の数、関わっている人間の数が多い。この③のタイトルに「劇場とは人間関係の束」と書いたのは、そのためである。The Albany は、「創作」や「表現」をキーワードとして常に人々が行き交う、本来の意味でのアートセンターである。

日本と比較してみれば、その差は歴然である。日本の公共劇場はホール空間に多くを割いている分、空間が活用されていない時間が極めて長く、ホールが利用されていない時間も空調・清掃・安全性などの維持管理のために膨大なコストを要する。人は巨大な建築物が街の中心にあることにシンボリックな意味を感じるものだが、それにしても効率が悪い。人口減少に伴い今後の日本経済が縮小していくことは明らかであり、日本国内の公共劇場運営が現在の規模を予算的に維持できるとはどうしても考え難い。その際、The Albany の運営のあり方は大きな参考になると考えている。

④劇場が持つ創作力を切り出すことの有効性

舞台芸術は総合芸術である、と言われる。演劇、オペラ、ミュージカルも然り。詩があり、踊りがあり、歌があり、美術創作があり、音楽創作があり、照明や服飾デザインがあり、創作の下地には学問的な研究があり・・・など、多くの要素を内容して舞台は成り立っている。これを担い得るということは相当な技術、ノウハウを舞台人・劇場人は備えているということを意味する。

が、果たして日本の舞台人・劇場人がそれら総合的な創作力をフルに使い切っているかといえば、そうでもない。その勿体無さを The Albany での研修は教えてくれた。つまり、せっかく技術やノウハウがあっても、自分たちの力の発揮のしどころはここまでののだ、という線引き、思い込みが、劇場の社会に対するアプローチの可能性、貢献の可能性を狭めているのだ。

例えば Albany では、毎週行われる定例の高齢者向けワークショップにおいて、スペースの飾り付けを怠らない。ここでは合唱の練習と手仕事のアート製作が行われるが、そうした際には、必ずアーティストやスタッフが部屋の装飾を欠かさない。壁にロゴを貼る。作業を行う各テーブルには、造花やオブジェを飾りつける。その日のお題となる創作の材料、絵の具や植物や文房具、各作業道具などを、アーティストが独特の並べ方をして参加者を待つ。単純なことであるが、そういった日常的なものの配置、空間づくりにも、レジデントカンパニーの中から現代美術系のクリエイターがやってきて、少しずつデザインや創作の要素を盛り込んでいる。

また、集会やシンポジウムの際にも、クリエイターの職能は発揮される。パネリストや聴衆が使用する壇上と客席の机とイスはどのように配置されるべきか、話し手はハンドマイクかピンマイクのどちらを使えば良いか、会場はどのような照明デザインにして、どのような音楽をかけておくべきか。日本では画一化され、神妙になりがちな集会やシンポジウムにおいても、The Albany では常に演出的な工夫がなされていた。このシンポジウムの話題は何か、どんな人たちをお迎えし、どんな雰囲気場に仕立てたいのか、それによって演出が行われる。ここでも、レジデントカンパニーから適切なデザイナーが選出され、腕を振るう。

日常的に行われるクラブ・イベント、半年に一度のティー・ダンス・パーティー、それら全てが、細かな創作、クリエイションに支えられていて、身近で小さなアート体験を参加する人にさりげなく、当たり前のように提供していた。

翻って、日本はどうだろう？ 職場である劇場のロビーは、その創作力を活かして演出されているだろうか。シンポジウム系のイベントは全てそのスタイルを画一的に決めてかかり、何もしないではないだろうか。創作とは、稽古場や工房に入って初めて行われるものではなく、もっと身近なところに偏在し得るものなのではないか。表現のチャンス、劇場人が持つ力の発揮のしどころは、「公演」以外の瞬間にも数多くあるのではないか、そのように強く感じさせた。

The Albany では、スタッフによる日常的な受付対応もフレンドリーかつパフォーマティブで、まるで道案内や観客誘導も芸のうち、と言わんばかりであった。してみると、日本の劇場にいる警備員や案内係は、まるで創作や創造と対極をいくかのように、画一化され堅い。

大切なのは、こういった言わば「創作能力の切り売り」は、アーティストや劇場による必死の営業努力であるということだ。全ては作品発表の場で作品に託して語れ、舞台上で表現されるものが全て、そういう美学もあるだろうが、The Albany でそんなことを言っていたらたちまちに食い詰めてしまう。これも、文化予算の削減を生き抜く決死の営みである。そういう背景を背負いながらも、The Albany の面々はいつもエンジョイしている。笑顔や余裕を忘れず、創作や創造を日常の中に溶け込ませている。

⑤社会包摂系事業とは、参加者の日常を変える創作

The Albany での企画はユルい。あくせくしない。追い込んでの創作をしない。そういう印象を持った。これらには当初、ある種の抵抗を覚えた。もっとブラッシュアップや修練ができるのではないか。作品の完成度を高めた方が良いのではないか。例えば参加型の演劇公演の場合、確かに出演者はプロではないのだが、せっかく観客が来るのだから、もっと練習をして完成度を高めるべきではないか。私はそう考えたことが何度もあった。しかし、その印象はある発見とともに変わる。

具体的な例を挙げよう。Albany に通うシニアたちは通例、毎週火曜日に劇場にやってくる。そしてワークショップを行う。ワークショップの名前は「Meet Me」。つまり、私に会う、という意味。ここには自分自身に会うという意味もあるだろうし、自分と同じように集まってくる別のシニアに自分に出会ってもらおうという意味もあるようだ。劇場や企画を通じて、これまで知らなかった自分自身を発見して欲しい。そう願って付けられた名前である。ここでは、先述したように合唱やアート創作が行われる。合唱といっても高度なものではなく、ルイ・アームストロングやビートルズ、サイモン&ガーファンクルなどの有名曲を皆で歌う。他方、アート製作といってもこちらも難しいものでなく、例えば押し花をやったり、レタリングをして、隣の人とおしゃべりし、休憩時間にはお茶を飲みながら気軽にエンジョイできるものがあてられている。

初め、私はそれらがあまりに簡単すぎるのではないかと思った。が、研修を続けるうちに、これらが Albany が行うシニア企画の基礎、もっとも初級編の窓口だということがわかってきたのである。そこからの応用編にはラジオ番組製作、美術館鑑賞への遠足、ティー・ダンス・パーティーづくり、など様々な企画があった。

その中でもここでは特に、シニアたちが出演して街場の会場で行った移動型演劇「Moving Day（ムービング・デイ）」を紹介したい。

「Moving Day（ムービング・デイ）」は参加希望のあったシニアたちを二班に分け、それぞれにショッピングモールと図書館での発表を行った移動型公演企画である。演者と観客はシーンの進行とそれぞれの施設内にある場所を移動しながら演じ、観劇していく。また劇の内容は主人公の「引っ越し」をめぐるエピソード。住まいが建物の老朽化により立ち退き～新居への引っ越しを余儀なくされる高齢者が主役の物語である。企画名の「Moving（ムービング）」は、「移動しながら演じ、観る」という公演のスタイルと、「Moving＝引っ越し」という内容にかかっている。半年以上をかけてこの劇は創作された。

まずはWS「Meet Me」から「Moving Day（ムービング・デイ）」に参加したい有志が集まる。構成・演出

として登用された演出家（レミーという名前だった）が創作を進行する。ちょっとしたコミュニティダンスをして体をほぐし、それぞれシニアに「引っ越し」にまつわるエピソードを聴く。人生経験豊富なシニアたちなので、たくさんのエピソードが披露される。英国では国境を越えた「引っ越し」も珍しくない。The Albany の土地柄、移民にも頻繁に会う。参加者は引っ越しの時に生じた軋轢や成功体験について話し、家族の話も率直にして、お互いに意見を言い合う。それぞれが思い出の品を披露して、思い出を聴き合う機会もあった。

それらを参考にレミーは構成台本を書き、両チームの公演会場の特性に合わせて上演形態をアレンジしていく。ちょっとしたダンスシーンもあり、踊りの練習もする。構成台本は箱書きのみで、設定と物語の方向性を示すだけ、せりふは即興である。だから「間違い」という概念がなく、シニアたちは自信满满で喋る。シニアたちが長い人生経験を経て得てきた即興力が創作に活かしている。そして本番なのだが、これがユルい。

公演は定時を過ぎて開演した。冒頭に劇の始まりを宣言するスピーチは紙を見ながらでも良い。劇進行とともにする移動はゆったりで、全くあくせくしない。アドリブも入れて、笑い合ったりもする。イスから立ち上がるシーンなど、足腰が弱っている演者がやっと立つのを、共演者も観客ものんびり待つ。何より、シーン間の移動時に、和気あいあいと喋ったりする。

これらユルさが極まったのが一日二回公演の際の休憩時間中で、演者の一人は再集合時間と手直し稽古をレミーが宣言していたにも関わらず、初回を観に来た家族とカフェに行ってしまう、ゆっくりと昼食を食べていた。当然、手直し稽古に遅れるのでスタッフである私はヤキモキしたのだが、他のスタッフたちは動じない。なぜならこの「Moving Day（ムービング・デイ）」を含む The Albany が行う高齢者企画は、この「家族との昼食時間」を重要視しているからである。確かに、公演とは観客に責任を負うものだ。観に来てくれる人の評価を求めるものだ。しかし、社会包摂系事業の創作に関しては、不特定多数の観客にもらう拍手以上に、家族や友人にもらう評価、公演によって起こる会話やコミュニケーションこそが大切なのだ。公演や発表があることで、普段ではできない自分語りや会話の時間を家族や友人を持つ。大袈裟に言えば、公演を通じて日常の関係性が変わる。これこそが重要なのだ。老いた父親や母親が演じるのを観て、子どもや孫や友人たちがカッコ良いと思う。「どんな風につくったの？」と会話が始まる。家族が経験した過去の「引っ越し」を一緒に思い出す。街場のカフェでランチをする機会が生まれただけでも良い。それこそが社会包摂系事業のキモなのだ。人は、身近な人たちから改めて好意や敬意を示されると、嬉しい。時にはかなり感動する。日常の中で固定化された関係性を新鮮に受け止め、新たなもののできることもある。

The Albany のスタッフはそういったことをよく心得ていて、カフェから遅れて帰ってきた演者を温かく迎え、二回目の公演に間に合うように、個別の修正作業をした。焦らせたりはしないし、共演者との関係もさして悪くならない。そういう配慮や振る舞いが身についている。演者にとって大切な親しい人たちとの時間を尊重しながら、公演が社会的なものである責任も、スタッフの立ち回りがフォローして両立させる。

プロの舞台人が持つ目的とは違う目的で、社会包摂系事業に関わる出演者にはキャストとして輝いてもらう。社会包摂系事業とは収入や芸術的な評価を目指すものではなく、参加者の日常を変えるための創作である。

⑥公演制作と社会包摂系事業の理想的な関係

このトピックについても、今回の研修は学ぶことが多かった。そのおかげで今後に向けて大きな目標を抱くことができた。よって、最後にレポートしたい。

私がこれまで日本の劇場で働きながら感じていた社会包摂系事業のあり様は次のような構図で成り立っている。すなわち、劇場の仕事の第一義は公演制作や施設の運用であり社会包摂系事業はその余剰で行う、というものである。それも無理からぬことで、劇場の中で日々行われている公演、貸し館、施設と組織の管理運営は膨大な業務量になるので、どうしても余剰分を劇場外部に差し向けざるを得ない。結果、収入に結びつきにくい社会包摂系事業の優先順位は下がる。これが日本の現状である。

そのようなことを考えながら The Albany の経営や事業運営に接すると、同劇場にとって社会包摂系事業が、公演制作や施設運営をした後に残る余剰で行う事業でなく、これを劇場が生き残りをかけて行う生命線として捉えていることが実感される。それは上記②の項目で書いた通りである。

財政的に、公的な資金の投入や寄付を募る根拠として、もはや芸術性の高い作品創作を根拠だけで劇場が成り立つ時代は過ぎ去っている。劇場の創作力を用いて社会に、そこに暮らす人々に何ができるかを必死に問い、実行することで社会の中で劇場の存在意義を獲得していかなければならない切迫感があった。

今、切迫感と書いたが、このことが必ずしもネガティブかと言えば、そうでもない。なぜなら、経済的な窮状をきっかけに劇場を社会に向かって開いていった結果、スタッフやクリエイターの能力もまた磨かれてきたからである。あるいは、それは狙って起こった現象では無いのかも知れない。けれども結果として、The Albany を拠点としているクリエイターやスタッフはいずれも創造性と社交性を両立させている人たちばかりだった。人当たり良く、多様な人々を劇場に受け入れるのに慣れている。手仕事を厭わない。にこやかである。そして、自身のクリエイションに入ればもちろん真剣である。

そういう人々と接し、彼らが活躍する姿を見る時、私はそこに社会包摂系事業と公演制作の理想的な関係性を発見した。経済的に切羽詰まった窮状がきっかけだったとは言え、地域に暮らす多様な人々との日々の出会い、付き合いは、劇場人・舞台人側の視座を拓け、人間力を高め、社会的に問題意識に開眼させてきたはずである。特に、作家として出発したメンバーがキャリアの早期に於いて障害者や高齢者、子ども、貧困層、移民に触れることは重要だ。極限すれば、それは「世界」を識ることに他ならない。そこで培われ、着想された表現が、The Albany のレジデントカンパニーによってロンドン都心の劇場で発表される光景にも立ち会った。

劇場にとって必須なのは技術と創作力だけではない。創作の動機となる人間観・世界観が重要である。それらを磨くためにも社会包摂系事業はある。日本の公共劇場でも、このような好循環を生み出さなけ

ればならない。ロンドンでの研修を終えた自分はそう考えている。



上：シニアや障害者たちが一堂に会する Tea Dance

右：Tea Dance 名物司会のクリス氏（左）と



C) 研修成果の活用計画

① 神奈川芸術文化財団 社会連携ポータル課が行う事業の発展

・2018 年度にスタートさせて以来、これまで行ってきた社会包摂系事業「共生共創事業」で展開してきたシニア用の劇団公演やダンス公演、障害者用のダンス企画やコンサートは、いずれも初手から創作的に高度すぎて、多くの参加者を受け入れられないという難点があった。それを改善するため、参加者の裾野を広げるための初級編的な企画をスタートさせる必要がある。具体的には、ミュージカルの代表的ナンバーをプロの指導のもとで歌うワークショップ、盆踊りが上手くなるための日本舞踊講座など、いずれも間口を広く取れるものである。

・劇場が持つ創作力を応用し、多くの人に親しみやすい年中行事イベントを行う。パフォーミングアーツは素晴らしいが、それだけで参加者をかなり限定してしまう嫌いがある。一方、核家族や離婚家庭、住宅の小型化の増加、町内会や商店街などの結びつきの弱体化は、日本人が四季折々に行ってきた年中行事を途絶えさせている。そんな中でも、子どものために自分が子どもの頃に体験した年中行事を成立させたいと願う家庭は少なくない。そこで、劇場の創作力を応用し、広く一般に親しみやすい年中行事を劇場が行うことで、多くの人が劇場に親しみ、楽しむための窓口となるイベントを作る。劇場のクリエイション能力を加えて演出した豆まきや餅つき、盆踊りの実施。劇場の技術力を駆使して行う、七夕飾りやクリスマスツリーづくりのワークショップなども考えられる。

② 神奈川県民ホール 事業課での実践

神奈川県民ホールが行う、地域への出張事業を強化・拡充する。

研修を終え帰国してから、これまで働いてきた神奈川芸術文化財団の社会連携ポータル課（社会包摂系事業や地域連携を担当）に加え、現在では神奈川県民ホールの事業課でも仕事をするようになった。神奈川県民ホールは2年後に開館50周年を迎えることからわかるように、広く県民に親しまれた劇場である。今後はますます神奈川県の市区町村にある公共劇場との連携も盛んになる。そこで、音楽制作をベースにしながら、県域の劇場との連携事業、共同制作事業を多く立ち上げたい。神奈川県民ホールは屋内でのクラシック音楽、バレエ、オペラを基調としているが、The Albany で培った経験をもとに、野外や県内でのユニークベニューを生かした鑑賞イベント、クラブイベントを立ち上げようと構想している。

②講演活動や意見交換機会の通じて行う他劇場や芸術文化系組織の企画強化

帰国以来、すでに東京都、神戸市、岡山県、三重県などから、The Albany での体験を共有して欲しいという依頼が来て、レクチャーに出かけている。単に報告としてのプレゼンテーションに終わることなく、今後は強固な協働関係をつくりたい。共同制作するイベントを立ち上げることでそれぞれの地域性や現場の苦労を共有しながら、コンサルタント的な役割を果たしていく。地域によって起こるさまざまな社会問題に対し、柔軟かつ多様な技術と知恵な事業で応えていく。今回、文化庁に機会を頂いた研修を活かし、公共劇場における未来型の企画運営を実践していきたい。

D) 研修国の情報

英国の劇場や創作団体を取り巻く危機的な経済状況と社会包摂系事業の相関関係についてレポートする。ロンドン滞在中、昼間は The Albany で研修し、夜に公演がない時には様々な催しを観に出かけた。The Albany の就業規則は厳格であり、18:00 にはきちんとオフィスが閉まる。片や、ロンドン全体に劇場での夜公演の開演時間は 19:30 である場合が多い。The Albany から都心の主だった劇場群までは 30~60 分で行けるところが多かったから、この組み合わせは出来るだけ多くの公演に接したい自分にとって好都合だった。

演劇、オペラ、バレエ、コンテンポラリーダンス、それらのキッズプログラムなど様々なものを観た。ライブハウスに行くこともあったし、クラシック、ジャズ、レゲエ、プログレ・・・といった音楽も聴いて回った。スタンダップコメディやバーレスク、スポーツ観戦、クラブ、フォークソングの同好会、教会でのセレモニー（珍しい合唱やオルガン、ミサ曲を聴くことができる）にも立ち会った。時には地方への遠征も重ね、要するに何でも観た結果、鑑賞本数は 300 本強になった。

それらの経験をもとにジャンルを問わない様々な知り合いができたが、ボリス・ジョンソン〜リズ・トラス〜リシ・スナクという具合に滞在期間中、矢継ぎ早に政権が交代していく中で、文化予算の削減については多くの劇場人、クリエイターたちが口々に私に伝えてきた。もちろん、ここには Covid-19 パンデミックや、ロシアとウクライナの戦争による電気料金の高騰も如実に影響していた。

とりわけ象徴的な例は、イングリッシュ・ナショナル・オペラである。古典から気軽なオペレッタ、新作まで、あらゆる上演を英語に翻訳して上演することで有名なこの団体は、助成金の大幅なカットにより

危機に瀕していた。助成金カットが発表されてから、公演の前に支配人が抗議と寄付を募るスピーチ、カーテンコールでは演者がお揃いのTシャツを着て彼らの意志を歌い上げる光景が見られるようになった。寄付を集めようという動きが本拠地である劇場ロンドン・コロシウム内外に満ちた。けれども、光明は見えない。英国政府は、同じオペラというジャンルにおいては国際的知名度が高く、観光客の憧れであるロイヤル・オペラハウスを選択した。けれども、上演の現場をよく知る人からすれば、ロイヤル・オペラハウスのルーティン・ワークを見詰め、イングリッシュ・ナショナル・オペラの創意工夫や活力を買う人も多い。

現在、イングリッシュ・ナショナル・オペラはマンチェスターへの移転を検討している。その際に雇用を白紙にされる人々は 600 人に及ぶという。中には移転先に向かう人々もいるだろうが、生活環境の激変は必至、失職する人々が多く出るのは間違いない。イングリッシュ・ナショナル・オペラの問題は英国の文化政策の窮状を物語る例として、あらゆる関係者が口にしていた。

このような、常に切実な危機感を持つ英国の劇場人は貪欲である。The Albany の面々もまた、劇場（＝自分の職場）の生存戦略に必死だった。公演の千穂楽まで寄付を募り、あわよくばスポンサーを得ようという常にチャンスを狙っていた。経営者クラスのベテラン職員だけでなく、その意志は新人や若手までにも貫かれていた。それらの姿勢は爽やかに闘争的で、貧乏くささやさもしさとは無縁であり、実に小気味良かった。

英国ほど追い詰められきっていない日本の劇場人が、ロンドンのような貪欲さ、快活さを以って社会と渡り合っていくことはできないだろうか。私たちの課題である。